気づきで築く協育環境

Development of students-teachers' co-growing environment through mutual awareness

福井大工¹, [○]葛生 伸¹

Univ. of Fukui¹, [○]Nobu Kuzuu¹

E-mail: kuzuu@u-fukui.ac.jp

【はじめに】20年あまりのエネルギー環境、物理、技術者、キャリアに関する多様な教育・啓発活動の中で様々な方々から多くの「気づき」をいただいた。その経験に基づき、先の見えない将来社会を人々がより良く生きていくための将来の個人・社会像を見据えた教育のあり方を考察する。

【将来の考え方】様々な気づきに基づき、先の見えない将来社会と自身の将来のありようを重ね合わせて考えることの重要性を認識した。同時に、多くの人々がよりよく生き行くための「自然環境」「社会環境」「人間環境」構築の視考が大切だと考えるようになった。さらに、“Sustainability”は語源的にはsus(下で)+tain(支える)のように解釈できることから、「持続可能性」はいろいろな意味での「最低限のレベルを上げていく」ことで、社会全体を活性化していくという観点での社会システムのデザインが大切だと考えるようになった。

【多様性の捉え方】国籍、性別、障害の有無など判別しやすい「多様性」の活用が着目されている。しかし、普通に学校に通い、普通に社会生活している人たちの多様性にも注目することの必要性を痛感している。現実には物事の理解・処理の仕方(以下「理解タイプ」)に多様性があるにも関わらず、「学校教育」では考慮されていないことが多い。著者自身の体験とともに、他者の教育・啓発活動や批評に対する「違和感」を通じて気付いた。

【気づきの重要性】児童・生徒・学生(以下「生徒等」と同様、教師の理解タイプも多様である。生徒等の教科の得手・不得手も生徒等と教師の理解タイプの不一致によると感じることも多い。その意味で、生徒等・教師ともに教育活動の中での気づきが大切だと考えている。高校まではいろいろな意味で、つまづきながら学習してきたが、大学に入って物理学の学習が自分に適っていたこともあり、生まれてはじめて学ぶことの喜びと、自分の居場所を感じた。そこで、自分と同様の方法で学べば、誰でも楽に学ぶことができ、つまづきから立ち上がれると思いこんでしまった。しかし、教育活動の中での違和感を通じて、それは違うことに気づいた。

【「気づき」の手がかり】こちらの意図しない説明や行為の有効性に学生の「受講前後の変容記述」によって気付かされたことも多い。「想定読者」を考えた執筆指導によってはじめて他の人のことを考えたようになったとの記述が多かった。グループワークでは、同じような境遇なのに様々な考えをしていることに気づいたと述べる者が多かった。そのような体験の中で、立場を変えて考えることが、筆者自身も含めた多くの人にとって難しいということに改めて気づかされた。さらに、ある大学教員向けの研修会で気づきを促す「触媒」になる言葉の重要性に気付かされた。

【物理現象をどう伝えるか】本シンポジウムのテーマの「物理現象をどのように伝えるか」は筆者にとって物理を学習しはじめてから今に至るまでの重要な課題である。筆者は、物理学科を卒業し、博士課程終了後化学系メーカーに就職した、企業生活12年のうち10年を過ごした出向先では、ほとんど工業高校卒の若い社員と仕事をしてきた。その時、物理現象を数式なしに伝えることが必要となった。大学に赴任後、様々な自然科学やエネルギー・環境に関する啓発活動で行ってきた。児童向けの啓発活動の中で、児童に対する説明を大人が目や顔を輝かせて聞いていることに気づいた。その体験を元に、PTA向け講座や教員免許状更新講習で数式を使わないで物理現象を説明するようになった。現在は共通教育科目でもそのような説明を取り入れた授業をしている。これらの活動の中で、数式なしに説明できないと分かった気になれない自分に気づいた。

【協育環境の構築の必要性】「教育」という言葉は教師が生徒等を育てるというニュアンスを強く感じる。私は教師と生徒等双方気づきを通じて、相手が理解できる説明を工夫していくとともに互いに成長していくという意味で「協育」という言葉を使っている。気づきを通じてよりよい協育環境を構築していければと考えている。